ぶんけい
教育ほっとにゅーす
かわら版

教育の小径（こみち）

No.180
2023 October
10月号

(一財)総合初等教育研究所参与
北 俊夫先生

今月のことば

親の心子知らず（おやのこころこしらず）

子どもはわが子を思う親の心情がわかりません。そのため、子どもが好き勝手にふるまうことをいいます。

教室環境とは何か －モノ、人、空気－

- 教室環境は、机の配置や掲示物などのモノ、子どもたちや教師による人、そのなかで醸しだされる雰囲気（空気）から構成されます。
- 学習環境のゆき届いた教室に入ると、教師の配慮が伝わってきます。教師のひと言や一挙手一投足は環境を構成する重要な要素です。

今月の記念日

10月21日　あかりの日

1879年のこの日、アメリカの発明家・エジソンが世界で初めて実用的な白熱電球を完成させました。これに因んで日本電気協会などが制定しました。

子どもの成長を左右する環境

「環境による教育」とか「人は環境によって育てられる」などといわれます。これは人間が人として成長するうえで、周囲の環境が大きな影響を及ぼすことを意味しています。小さな子どもほど、環境の影響を大きく受けるようです。人間はたとえは一人であっても、環境のなかに組み込まれていますから当然のことです。

人間を取り巻く環境には、一般に人や施設や設備などを中心にした社会的な環境と地形や気候、動植物などの自然的な環境があります。

子どもたちが日々学んでいる主要な学習環境は教室です。教室には机や椅子、黒板、パソコン、図書、それにさまざまな掲示物などがあります。いまでは少なくなりましたが、花をいけた花瓶が置かれている学級もあります。これらはいずれも物的な環境です。

学級には大勢の友だちや担任の先生もいます。学習集団は学級全体であったりグループ（班）であったりしますから、人的な環境は常に変動します。ときには、地域の方が子どもたちの指導に関わることもあり、これらの人たちも人的な環境です。

さらに、環境として重視したいのは学級の空気や雰囲気です。教室に入ると、子どもたちと教師のあいだに醸しだされている空気を感じます。緊張感の張り詰めた学級、家庭的な雰囲気を感じさせる学級などさまざまです。

これらのモノ、人、空気といった環境を構成する要素は、いずれもその場の子どもたちの成長に大きく影響します。教室環境とか学習環境などといわれ、環境の整備は日々の学級経営において重要な課題になっています。

学習環境のゆき届いた教室

教室に入ったとき、まず気づくことは子どもたちの机の配置です。教師の指示が徹底するよう、すべての机が一方向を向いた配置、子どもにグループでの協働的な学習を促す配置、テストなど個別的な学びに適した配置など、担任の授業の進め方がみえてきます。

教室内のさまざまな掲示物にも目がいきます。学校の教育目標や学年・学級目標、子どもの係活動の分担表が掲示されています。子どもたちの作品や「昨日の出来事」のコーナーに新聞記事が掲示されていることもあります。掲示物から、担任の学級経営の方針や学級づくりへの子どもたちの参加度が伝わってきます。掲示物を日替わりで工夫していることもわかります。

次に、子どもたちの活動の様子や発言の内容から、子どもたちの人間関係がみえてきます。どんなことでも自由にいえる学級もあれば、子どもたちがどこかギスギスしている学級もあります。子どもたちが友だちの優れたところを学んだり、つまずきをフォローしたりしている場面に出会うと、どこかホッとします。学び合い、支え合う信頼関係が醸成されているからです。こうした場面から、日ごろの担任の指導が伝わってきます。

子ども同士の人間関係や子どもと教師とのよい関係がつくられていると、子どもたちは学校生活への充実感を味わい、学力や体力の向上にも貢献するものと思われます。

さらに、子どもたちを観察していると、学習環境が配慮されている学級では、教師が主要な環境であることに気づきます。教師のふるまいや言葉づかいなど一挙手一投足に細やかな配慮がみられます。特につまずいている子ども、学習に遅れがちな子どもには手厚い指導をしています。子どもたちは教師の言葉や行動から人間として大切なことを学んでいることでしょう。

モノ、人、空気の面で学習環境がゆき届いている学級では、教師が子どもたちに温かく接し、細やかな配慮をしていることに気づかされます。

子どもの発言へのリアクション

事実の羅列的な発言

雪国の交通や道路について調べていたときです。子どもたちから、「道路に融雪パイプがある」「信号機が縦になっている」「除雪車が用意されている」「雪を集める広場がある」などさまざまな発言が出されました。このあと、教師はどうリアクションしたらよいのでしょうか。

資料を活用する場面では、上記の発言にあるように、まず事実を読み取る活動が行われます。上記のような発言のあと、教師は「いろんなことがわかりましたね」と言って、話題をほかのことに移してしまうこともあります。これでは学びが深まりません。

「事実をもとに考える」ことが重要です。これによって事象や事実の意味がわかるようになるからです。「見えること（事実）から見えないこと（意味や働きなど）を考える」ことは、事象の本質を捉えるための重要な操作です。事実から見えないことを考えさせることは、帰納的な見方や考え方をすることであり、複数の具体的な事実を一般化、概念化することです。

ここでは「つまり何が言えますか」「まとめるとどういうことですか」「いずれにも共通して言えることは何ですか」などとリアクションします。先に示されている事実はいずれも「大雪に備えていること」です。これらの事実をもとに、「備え（予防）」という概念を導き出すことができます。

教育の動向

学校におけるＡＩの使用

社会において、「チャットＧＴＰ」など生成ＡＩ（人工知能）が話題になっています。文部科学省は、今後学校教育にも導入されることを見込んで、学校における取り扱いのガイドライン（指針）をとりまとめました。

それによると、「生成ＡＩは発展途上にあり、個人情報の流出や著作権侵害、偽情報の拡散」とともに、「思考力や創造性、学習意欲への影響」があると懸念を示しています。

指針では、使用の適切な例として、グループ学習で足りない視点を見つける。英会話の相手として活用する。生成ＡＩの誤った回答などを教材として使用するなどをあげています。一方、不適切な使用例として、メリットとデメリットを学習せずに使用する。読書感想文やレポートなど自分の成果物として応募したり提出したりする。定期考査や小テストなどの問題として使用するなどを例示しています。

ＡＩは学びのひとつの道具です。道具に使われない、主体的に活用する能力を育てたいものです。答えを安直に求める姿勢を改め、自分で考え、判断し、責任ある行動がとれる人間を育てることが一層求められています。

小学校の段階では、子どもたちの情報活用能力や公正な判断力が十分育っていないことから、使用することには慎重でありたいものです。

北俊夫の「実践と研究」の足あと48

連載の終了に当たって

私のこれまでの５０数年間の教育人生は、学校で授業や教育活動に実践家として取り組んだ時期、教育委員会や文部省で指導行政に携わった時期、岐阜大学と国士舘大学で教員を目指す学生を指導した時期、大学を離れてから比較的自由な身で学校や先生方に関わっている時期の４つのステージから構成されます。この間のキーワードは一貫して「学校教育」でした。

これまでを振り返ると、さまざまなことが頭をよぎります。その一つは、多くの先生方に教えられ、支えられながら充実した仕事ができたことです。「ヒト（未熟な個人）はひと（周囲の人たち）によって人（成長した個人）になる」ことを実感しました。

その二つは、子どもたちに求めていることが自分に十分できていないことに気づいたことです。主体的に学ぶ子どもを育てることを目指してきましたが、私自身に主体的に学ぶ能力や態度がまだまだ養われていません。常に謙虚な気持ちと姿勢で学び続けることの大切さを思い知らされました。

いま一つは、私が先達の先生方から教えていただいたことを後進に伝えることを心がけてきたことです。わが国には、授業や教育活動について多くの優れた遺産があります。これらの教育の文化遺産を学校教育を担っているさまざまな人たちに引き継ぐお手伝いができればと思い続けてきました。

終わりに、４年間（４８回）にわたって小欄のコラムを読んでいただいたことに心から感謝申し上げます。これからも学校教育の「実践と研究」に関わっていく考えです。〔未完〕

編集後記

「チャットGPT」などの生成AIは、誰もが普通に使う状況になるかもしれません。「使ったことがない」「分からない」ではなく、まず自分自身で活用してみたところ、「すごい！」と感じたところと、AIは万能ではない、という点を身をもって体験しました。今後も、編集後記は生きた言葉で届けていきたいと思います。（Y記）

ぶんけい きみの手に、みらいの夢を。
企画・編集：ぶんけい教育研究所
発　　行：株式会社文溪堂
発 行 日：2023年10月1日